

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00621

研究課題名（和文）言語変化の要因についての基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on the causes of language change

研究代表者

大木 一夫 (OKI, Kazuo)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：00250647

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、言語変化の要因にはいかなるものがあるかという点について分類・整理し、大きな枠組みを構築することを目的とした。

その結果、言語変化の要因とは、言語変化前の状況をより都合よくする、より効率化するために人間が変化させるという理解にたつべきだと考え、[A]言語記号を運用するにあたって効率的に運用する、[B]話者自身が言語を使うことによっておこなう自身の位置づけを適正化するという2つを言語変化の要因の大きな枠組と考えた。また、前者の下位分類には、発話労力の効率化・記憶労力の効率化・伝達の効率化・表現効果の適正化を、後者にはアイデンティティの適正化・言語社会の維持を認めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日本語史研究では言語変化の要因を日本語に即して積極的に検討した研究は多くなく、方言研究などの日本語史研究以外の他分野の知見も含めて総合的に検討を加えるような検討も十分ではない。本研究は、このような基礎的研究・他分野の知見も総合していくという点で特徴的である。また、ここでの研究成果は、現在進みつつある日本語史の理論的な検討をより本格的な軌道に乗せる役割の一端を果たすことになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to classify and organize the factors of language change, and to build a broad framework.

We consider that the factors that cause language change should be understood as changes made by humans to make the situation more convenient or more efficient before the language change. and we considered [A] efficient use of linguistic symbols and [B] optimization of the speaker's own position in the language by using the language as two major frameworks. The former subcategory includes efficiency of speech effort, efficiency of memory effort, efficiency of transmission, and optimization of expressive effect, while the latter includes optimization of identity and maintenance of linguistic society.

研究分野：日本語学

キーワード：言語変化 日本語史 言語史

### 1. 研究開始当初の背景

日本語史研究は日本語学の中で一定の位置を占める分野であり、盛んに研究が進められてきた。成果も積み上がってきており、日本語史的な事実的な側面は相当程度明らかになっている。ただ、言語史研究としての日本語史研究は、言語史研究の大きな課題のひとつである言語はなぜ変化するのか(言語変化の要因)という問いに十分に答えてきたとは言いがたい。それは日本語史研究、なかでも当該分野の中心的手法をとる文献日本語史研究が、古い文献に見られる言語の姿を精確に記述することを中心的な課題としてきたということに起因するといえる。もちろん、そのような態度は重要であって、それが日本語史研究を精緻なものにしてきた。しかし、日本語史研究が言語史研究である以上、この課題に答えることが必要である。また、言語史研究においてこの点を考えなければならないことは、大木一夫「言語史叙述の構造」(『日本語史叙述の方法』ひつじ書房 2016)でも、言語史叙述が「因果関係」の要素を必要とすることを示したことからいえる。

ただ、近年は言語変化の要因を日本語において検討するという動向が生まれてきている。渋谷勝己の議論(渋谷勝己他『日本語史のインタフェース』岩波書店 2008)、小柳智一の文法化や言語変化の段階に関する議論(小柳智一『文法変化の研究』くろしお出版 2018)は、この点を理論的に検討する議論である。また、言語変化を動的にとらえようとする日本語文法史研究として青木博史『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房 2016などが著され、さらに、日本語史研究の理論的側面の検討も進みつつある。大木一夫・多門靖容『日本語史叙述の方法』ひつじ書房 2016では、日本語史を歴史として叙述する方法の検討がおこなわれ、大木一夫『ガイドブック日本語史』ひつじ書房 2013では日本語史研究の方法論が整理されている。このように、日本語史研究の理論的側面の検討が活気を帯びつつあり、このなかで、言語はなぜ変化するのかという点を考える基盤を構築しはじめる好機が訪れているといえる。

### 2. 研究の目的

このような状況を考えてとき、言語はなぜ変化するのかという点についての検討を進めていくための基礎的研究として、まずは、言語変化の要因にはいかなるものがあるかという点について分類・整理し、その大きな枠組みを構築する必要があると思われる。もちろん、上述の渋谷勝己・小柳智一もこの点について検討を行っているが、さらなる概念整理が必要と考えられ、また、具体的な事例をさらに積み重ねた上での、枠組み構築が求められていると考えられる。

そこで、本研究においては、次のような点についての検討を行い、方言研究などの日本語史研究以外の他分野の知見も含めて総合的に検討を加えていくことにする。

- (1) 言語変化の要因とは、そもそもどのようなものを想定するのがよいのか。
- (2) 言語変化の要因を考えるにあたり、言語変化の過程・段階にどのようなものを想定しておくことになるのか。
- (3) 機能的側面から考えたとき、言語変化の要因の類型・枠組みは、どのようなものになるのか。

このような方向性での検討は、次のような意義があると考えられる。すなわち、従来の日本語史研究では理論的な側面の基礎的研究は必ずしも積極的には行われてこなかった。そのため、これまで言語変化の要因を日本語に即して積極的に検討した研究は多くない。また、方言研究などの日本語史研究以外の他分野の知見も含めて総合的に検討を加えるような検討も十分とは言いがたい。このような基礎的研究を進め、他分野の知見も総合していくという点が、本研究の特色といつてよい。また、本研究の成果によって日本語史における各種の言語変化の要因を位置づけることがより具体的に可能になり、多くの日本語史研究においても、そこで起こる言語変化のあり方をとらえやすくなるといえる。さらに、ここでの研究成果は、現在進みつつある日本語史の理論的な検討をより本格的な軌道に乗せる役割の一端を果たすことになると考えられる。つまり、日本語における言語変化についての議論の活性化につながると考えられる。

### 3. 研究の方法

上記 2. の目的に示した(1)~(3)の諸点につき、次のように検討を行うことにする。

- (1) 言語変化の要因とは、そもそもどのようなものを想定するのがよいのか。  
言語が変化するのは、新たな表現目的によって、すでに準備された技術と資材を利用しつつ、新たな表現を創り出すということなのだと思えば、従来、よくとらえられてきた枠組としての(a)言語接触、(b)言語の内在的な力といった点を言語変化の要因とする議論は、不十分だと考えられる。そこで、この(1)のような点を、まず検討する。
- (2) 言語変化の要因を考えるにあたり、言語変化の過程・段階にどのようなものを想定しておくことになるのか。

言語変化の要因とは、新しい言語表現の採用・廃棄を推進するものと考えられるが、このことを考える前提には、言語変化の過程・段階というものがどのようなものであるのかということの検討が欠かせない。この点は、すでに小柳智一が検討を進めているが、本研究においてもあらためて検討する。

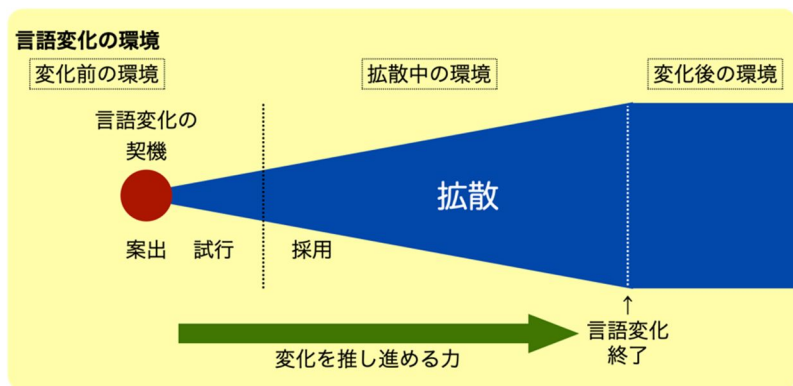
- (3) 機能的側面から考えたとき、言語変化の要因の類型・枠組みは、どのようなものになるのか。言語変化の要因の類型・枠組みは、機能的側面から音韻変化の要因の枠組みを示した有坂秀世の説(有坂秀世『音韻論 増補版』三省堂 1959)があり、本研究における有力な視座といえる。ただし、枠組みとしては十分とはいえない点もあるため、有坂が十分考えてこなかった側面にも注目しつつ分析を行う。

#### 4. 研究成果

- (1) 言語変化の要因とは、そもそもどのようなものを想定するのがよいのか。  
 コセリウのいうように(コセリウ『言語変化という問題』岩波書店 2014)言語が変化するのは、新たな表現目的によって、すでに準備された技術と資材を利用しつつ、新しい表現を創り出すということであるということは、基本的に認めるべきであろう。そうすると、(a)言語接触、(b)言語の内在的な力といった従来言語変化の要因(の分類)として示されてきたのは、十分な理解とはいえないことになる。(a)については、たとえば、マスコミの発達による共通語化など、(b)については簡略化、同音衝突、類推などといったことが言語変化の要因とされるという傾向があった。しかし、言語が変化するのは新たな表現目的によるのだとすれば、それらは表現目的の問題というよりは、言語変化の過程につけられたラベルというべきものであろう。あるいは、言語変化の要因を(A)生理的な要因・(B)認知的な要因・(C)社会的な要因のように分類するとするものも、上述のような点からすれば、言語変化の要因分析に届いていないといえる。もちろん、それらが言語変化の要因とはかかわりないということではできないが、あくまでも過程の一端を示しているに過ぎない。  
 結局は、言語の変化というものは、なんらかの表現目的によっておこるのだという立場に立てば、変化の要因とは、言語の機能的な効率性や表現の目的に沿うためという方向性でとらえるべきであるといえる。そして、このような帰結は、言語変化の要因を考えるにあたって、有坂秀世の示すものを基礎として考えることの有効性の基盤となるものである。
- (2) 言語変化の要因を考えるにあたり、言語変化の過程・段階にどのようなものを想定しておくことになるのか。

この言語変化の過程・段階という点では、すでに小柳智一の「案出 試行 採用」という考え方があり、きわめて有力であるといえる。そのことを前提とした上で、言語変化の要因を考えるためには、もう少し考えておくことがあると思われる。それは、言語変化の過程の枠組というべきものである。小柳の議論は、変化して生まれてきた言語現象について「案出 試行 採用」というのであるが、その「案出 試行 採用」が置かれる環境というものを考えておいてもよいのではないかと考えられる。たとえば、新しい変化の前提として新しい形式が案出されることになると思われるが、その新しく案出された形式が案出された事情には、それが案出されるにあたっての言語環境がかかわってくるといったことがありそうだからである。一つの例として類推という過程を考えてみると、類推するにあたっては、一定の規則的な環境があるのが前提である(たとえば、「ら抜きことば」でいえば、一般動詞と可能動詞が対応するという体系が前提となるであろう)。また、その環境は「試行」なり「採用」なりにも影響をあたえると思われる。したがって、小柳の「案出 試行 採用」を認めながら、言語変化の過程の枠組というべきものを用意しておくのがよいのではないかとと思われる。

その概略を示せば、次の図のようになるであろう。おおむね、「変化前の環境」「言語変化の契機」「拡散の過程」「拡散中の環境」「変化後の環境」といったところである(ただし、これは過程に過ぎず、要因ではない)。そのような言語変化の過程の枠組のなかを進んでいくのが言語変化であって、その進みを推し進める力が変化のための表現目的ということになるであろう(それを図内では「変化を推し進める力」とした)。



- (3) 機能的側面から考えたとき、言語変化の要因の類型・枠組みは、どのようなものになるのか。  
 以上のような立場に立てば、言語変化の要因とは新たな表現目的による、すなわち、言語の機能的な効率性や表現の目的に沿うためととらえるのが、基本的によいということになる。そうすると、言語変化前の状況をより都合よくする、あるいは、より効率化するために人間が変化させるという理解にたつことになるだろう。この点で、小柳智一は、言語変化の要因とは旧来にない何らかの利点を求めるということであり、それは具体的には、新出の言語表現が機能的に優れているという機能的利便性と、新出の言語表現をめぐる評価が高いという評価的社会性に集約されるという。

この小柳が掲げる点は賛成すべきである。ただ、やや不足する面があると考えられる。また、どのような変化のタイプがその要因の枠組に属するかといった点はさらに考えておくのがよいと思われる。

そこで、本研究においては、言語変化の要因として、概略、次のような枠組を想定する。言語変化とは次のようなことを実現するために言語を改変するという現象といえる。

[A] 言語記号を運用するにあたって効率的に運用する。

- 1 発話労力の効率化：同化・音脱落・短縮...
- 2 記憶労力の効率化：類推・逆成・民間語源による語形成...
- 3 伝達の効率化：同音語の回避、機能負担量、体系調整...
- 4 表現効果の適正化・向上：新概念への対応、表現効果向上、修辭的新語...

[B] 話者自身が言語を使うことによっておこなう自身の位置づけ(アイデンティティ)を適正化する。

- 1 アイデンティティの適正化：顕在的威信、潜在的威信...
- 2 言語社会の維持(同調): 異化、音位転倒...

ただし、言語変化の要因は、何らかの「目的」だとするとした場合、言語の変化は意識的な採用ということはあまりないことからすれば、その「目的」は意識的なものではないはずである。すると、その「目的」とは、どのようなものであるかを考える必要がある。それにあたっては、認知科学において知られるシステム1=「直感的で無意識のうちに自動的におこなわれる認知」と、システム2=「自覚的で制御的な熟慮をとまなう認知」という人間の認知のあり方の区分が、この「目的」をとらえる際に有用である可能性をもつのではないか(マンテクロウ『試行と推論』北大路書房 2015 等)。言語変化の「目的」は意識的なものではないとすれば——もちろん、これで十分とはいえないと思われるものの——その「目的」とはシステム1の問題なのではないかと考えられるのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大木一夫	4. 巻
2. 論文標題 テ形補助動詞成立史概略、拾遺	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーパスによる日本語史研究 中古・中世編（青木博史・岡崎友子・小木首智信編）	6. 最初と最後の頁 65-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木一夫	4. 巻
2. 論文標題 対照文法の領分	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語の歴史的対照文法（野田尚史・小田勝編）	6. 最初と最後の頁 21-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木一夫	4. 巻
2. 論文標題 『源氏物語』の語彙	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 シリーズ 日本語の語彙 2 古代の語彙（佐藤武義編）	6. 最初と最後の頁 84-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木一夫	4. 巻 146
2. 論文標題 訓点資料研究に期待すること 文法史研究から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 86 - 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木一夫	4. 巻 38-8
2. 論文標題 日本語史演習	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大木一夫
2. 発表標題 文を発する際の意図についての理解
3. 学会等名 日本語音声コミュニケーション学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大木一夫編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 ガイドブック日本語史調査法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------